

中学生の体育授業における回避的態度と学習方略

Avoidance Attitudes to Physical Education Classes and Learning Strategy in Junior High School Students

當山 貴弘* 中須賀 巧** 八尋 風太* 杉山 佳生***
 TOYAMA Takahiro NAKASUGA Takumi YAHIRO Futa SUGIYAMA Yoshio

本研究の目的は、体育授業における回避的態度と学習方略の関係が男女によってどのように異なるのかについて検討することであった。中学生 234 名を対象に、体育授業における劣等コンプレックス尺度、学習方略尺度を用いた。分析モデルは、体育授業における回避的態度を独立変数に、学習方略を従属変数に位置づけ男女別で共分散構造分析を行った。その結果、男子においては C-運動スキルが SH 方略に負の影響を及ぼすことが認められた。また、C-心理・社会・身体要因が一般学習方略を低下させ、SH 方略を向上されることが確認された。女子においては、C-運動スキルから学習方略への影響は認められず、C-心理・社会・身体要因が一般学習方略を低下させ、SH 方略を促進させることが確認された。このことから、男子生徒と女子生徒では、体育授業における回避的態度と学習方略の関係が異なることが示唆された。

キーワード：体育授業、回避的態度、共分散構造分析、性差

Key words : physical education class, avoiding attitude, covariance structure analysis, gender difference

背景

中学校体育授業では、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができるよう「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう力、人間性等」を育むことが求められている。中でも「学びに向かう力、人間性等」についての指導内容が明記されているのは、体育科のみとなっている（今関，2019）。つまり体育授業は、「学びに向かう力、人間性等」に対して明確な目標や具体的に指導内容が存在している点で他教科とは異なるといえる。「学びに向かう力、人間性等」の観点別評価（学習状況を分析的に捉える評価）として「主体的に学習に取り組む態度」が挙げられる（今関，2019）。この主体的に学習に取り組む態度の評価においては、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を確認することが求められる（文部科学省，2019）。つまり、体育授業を担当する教師は、生徒が自らの運動技術を把握し、適切に学習課題を選択できるなどといった自己調整を通じた学習ができてよう支援していく必要があると考えられる。しかしながら、学習者の自主性に任せ、単に自己調整学習をしたとしても、学習方略が身につけていなければ、自己調整学習が成立しない（玉木・伊藤，2003）と指摘されている。そのため、学習者の自己調整学習を支援するためには、教師は生徒のもつ学習方略について把握しておく必要がある（阿部・久坂，2020）。学習方略とは、学習の効果を高めることを目指

して意図的に行う心的操作あるいは活動のことである（辰野，1997）。これまでの学習方略に関する研究では、記憶や思考などの認知過程を調整することで効果的な学習を促す「認知的方略」と、学習の計画を立て、学習の進み具合をモニターし、その結果を自己評価するなどメタ認知機能を通じて学習の効率化を図る「メタ認知方略」の2つの側面が主に取り上げられてきた（伊藤・神藤，2003）。そして、このような学習方略の研究は、それぞれの教科に則して研究が行われている。例えば堀野・市川（1997）によると、英単語における学習方略には、「1つの単語のいろいろな形（名詞形・動詞形）を関連させて覚える」などの英単語を体系化して記憶しようとする「体制化方略」、単語のイメージやニュアンスをつかもうとする「イメージ化方略」、繰り返し単語を学習しようとする「反復方略」が存在していることを確認している。また市原・新井（2005）は、数学の学習方略について暗記・反復方略（例：何度も同じ問題を解く、など）や意味理解方略（例：公式や法則はただその形を覚えるだけでなく、どうしてそのような形になるのかを考える、など）を抽出している。さらに、国語教育に着目した犬塚（2002）は、読解方略がテキスト全体の内容を学習しようとする「内容学習方略」、部分的なつまづきを解消しようとする「部分理解方略」、自分の知識と結びつきを考える「理解深化方略」から構成されていることを報告している。これらのことから、学校教育における学習方略の研究は、「認知的方略」や「メタ認知方略」を基軸としながらも、それぞれの教科によって様相の異なる方

*九州大学

令和3年7月16日受理

**兵庫教育大学大学院人間発達教育専攻生活・健康・情報系教育コース 准教授

***九州大学

略が存在することが確認できる。

体育授業の活動は、主に体育館やグランドで行われること(宮本, 2016)や学習者が互いに関わりながら学習が進められる機会が多い(松田, 2002)といった特徴がある。そのため本邦では、体育授業に焦点をあてた学習方略の研究も行われている。伊藤ほか(2013)は、玉木・伊藤(2003)の尺度を一般学習方略とし、そこに不適応的な方略であるセルフハンディキャッピング方略(以下、SH方略と略す)を加え、学習方略の肯定的な側面と消極的な側面の検討を行っている。SH方略とは、自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり、かつそこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合、遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり、自らハンディキャップを作り出す行為である(安藤, 1990)。SH方略には、努力の差し控え、困難な課題の選択、不安や身体的不調の訴えといった内容があり、このような行動が教師やコーチ、仲間からの強い叱責や非難を受ける可能性がある(伊藤, 2012)。これらのことからSH方略は、学業やスポーツでの達成を阻害する非適応的なものである(森年・伊藤, 2010)とされている。つまりSH方略の多用は、技能向上が見込めないうえに、周囲から非難を受ける可能性があり、心理的不適応を引き起こす要因となると考えられる。そのため、体育授業においては生徒の学習方略を低減させ、SH方略を促進させる要因について明らかにし、それを抑制することが求められるといえる。体育授業においてSH方略に及ぼす影響について検討を行ったOmmundesen(2006)と伊藤ほか(2013)は、他者に無能と思われたくないと考え、最小限の努力で課題を逃れようとする回避的な学習動機(例:授業で運動をするだけで、それ以上の運動はしたくない、など)がSH方略を促進させることを報告している。また、このような回避的な学習動機は、深く考えながら内容を理解し、知識を増大させようとする方略に負の影響を及ぼすこと(三木・山内, 2005)が示されている。このことから、体育授業への回避的な捉え方が一般学習方略を低下させ、SH方略を促進させると考えられる。しかしながら、先述したように学習者同士が交流しながら学習が展開される体育授業においては、回避的な学習動機が直接的に不適切な学習方略に結びつくとは考えにくい。例えば、回避的な学習動機が高い生徒においても、周囲の仲間に対して好意的な感情を抱いていれば、積極的な行動が引き起こされる可能性もある。そのため、体育授業において学習方略を規定する要因について検討する際には、学習動機という生徒の認知的側面のみ着目するだけでなく、感情的側面と行動的側面も含む回避的態度を取り上げて検討する必要があると考えられる。また個人の態度が把握できれば、人の行動をある程度、予測できる(西田, 2012)ことが指摘されていることから、本研究では体育授業における学習方略に影響を与える要因として回避的態度に着目する。佐々木・須甲(2016)の劣等コンプレックス尺度は、体育授業において「自らが劣っ

ていること」を認識し、それによって表出される回避的な態度を測定することが可能とされている。体育授業における劣等コンプレックス尺度は、運動技能の低さを理由に回避的な態度を示す運動スキル焦点コンプレックスと運動技能以外の要因(心理的特性、環境要因など)を理由に回避的な態度を示す心理社会的及び身体的焦点コンプレックスの2因子から構成されている。これら2つの因子の向上は、ストレスを脅威であると認知する傾向がある(佐々木・須甲, 2016)とされている。また、運動技能の低さを理由に回避的態度を示す生徒は、自我志向性が高い生徒であること(當山・中須賀, 2018)も確認されており、このような志向性を抱く者はSH方略を選択する傾向がある(伊藤, 2012)とされている。しかしながら、これまで体育授業における回避的態度と学習方略について検討した研究は、ほとんど見当たらない。そこで、本研究では、体育授業における回避的態度と学習方略の関係について明らかにすることを目的とした。その際、体育授業における回避的態度においては、男子生徒と女子生徒で性質が異なる可能性がある(佐々木・須甲, 2016)ため、性差を考慮した分析を行うこととした。

3. 方法

1) 調査対象者および調査時期

中学校2校に在学する3年生248名が調査対象となった。そのうち、データに不備のなかった234名(男子117名、女子117名:平均年齢14.9±.30歳:有効回答率94.35%)を分析対象者とした。調査時期は、2019年2月から3月であった。

2) 調査手続き

調査は学校長の許可を得た後に保健体育科教員に依頼し、体育授業時に集団実施を行った。調査用紙の表紙には、調査がテストでないこと、学校の成績と関係ないこと、得られたデータの秘密が守られることが記された。回収された調査票については、協力教員がまとめて研究代表者宛に郵送された。

3) 調査内容

(1) フェイスシート

基本属性として学年、学級、年齢、性別について尋ねた。

(2) 体育授業における劣等コンプレックス尺度

体育授業における回避的態度を測定する尺度には、佐々木・須甲(2016)の体育授業に対する劣等コンプレックス尺度を用いた。佐々木・須甲(2016)は、劣等コンプレックス尺度を作成し、運動スキル焦点コンプレックス(以下、C-運動スキル)並びに心理社会的及び身体的要因焦点コンプレックス(以下、C-心理・社会・身体要因)の2因子を抽出している。C-運動スキルは、運動の能力やスキルに対して「劣っている」と主観的に

感じ、それを口実に課題に取り組むことを回避する態度である。一方、C-心理・社会・身体要因は、運動スキルの劣等性を認識させる心理・社会・身体要因を理由に「課題に取り組まない・取り組めない」という態度を説明する因子である。全ての項目における回答方法は、各項目について「よく当てはまる」(5点)から「全く当てはまらない」(1点)の5段階によって評定するように求めた。

(3) 体育授業における学習方略尺度

体育授業における学習方略を測定する尺度には、伊藤ほか(2013)が作成した体育授業における学習方略尺度を用いた。この測定尺度は、2つの下位尺度から構成されている。1つ目は、学習効果を高めるために行う一般的な方略を説明する一般学習方略である。続いて、2つ目は失敗が予測される場合において、あえて自分に不利な行動を選択し、失敗の言い訳づくりに専念するといった拒否的・回避的な学習方略を説明するSH方略である。これらの因子を構成する全ての項目への回答は、「よくあてはまる」(5点)から「まったくあてはまらない」(1点)の5件法によって求めた。この尺度は、伊藤ほか(2013)によって、小学生を対象に信頼性および妥当性が概ね確認されている。しかしながら本研究では、中学生を対象としているため、信頼性と妥当性を確認してから本尺度を使用することとした。

4) 仮説モデル

体育授業における回避的態度と学習方略の関係について明らかにするため、劣等コンプレックスを独立変数に、そして学習方略を従属変数とする仮説モデルを設定した。伊藤ほか(2013)は、体育授業において学習動機が回避的である場合、SH方略を選択する傾向があることが確認されている。また三木・山内(2005)は、回避的な学習動機が、深く考えながら内容を理解し、知識を増大させようとする学習方略に負の影響を及ぼすことが示されている。これらのことは、体育授業における生徒の回避的な態度が一般学習方略やSH方略に影響を及ぼすことを示唆している。また、佐々木・須甲(2016)によると女子生徒は、女性らしさから逸脱しないためにあえて体育授業で回避的態度を示す可能性があることを述べている。このことから、体育授業における回避的態度においては、男子生徒と女子生徒で性質が異なることが考えられ、学習方略に及ぼす影響においても違いがあると考えられる。そこで、本研究では劣等コンプレ

クスから学習方略のパスを想定した仮説モデル(図1)を設定し、性別ごとに分析を行うこととする。

5) 統計解析

まず、体育授業における学習方略について、妥当性と信頼性を検討するために確認的因子分析を行い、クロンバックの α 係数を算出した。確認的因子分析におけるモデル採択の判断には、Goodness of Fit Index(以下、GFIと略す)、Adjusted Goodness of Fit Index(以下、AGFIと略す)、Comparative Fit Index(以下、CFIと略す)、Root Mean Square Error of Approximation(以下、RMSEAと略す)の適合度指標をもとに行うこととした。これらの判断は、GFI、AGFI、CFIは.90以上、RMSEAは.10以下とした(小塩, 2017)。各尺度内容の基本統計量(平均値、標準偏差、相関係数)を性別ごとに算出した。なお、各尺度得点における性差を確認するために、 t 検定を行った。そして、体育授業における劣等コンプレックスの下位尺度を独立変数、学習方略尺度の下位尺度を従属変数としたモデルについて男女ごとに共分散構造分析を行った。モデル採択の判断には、上記のGFI、AGFI、CFI、RMSEAを用いた。分析には統計パッケージのIBM SPSS Statistics 22.0ならびにIBM SPSS Amos24.0を使用した。なお5%未満を有意差があると判断し、5%以上10%未満を有意傾向とみなした。

結果

1) 体育授業における学習方略尺度の信頼性及び妥当性の検討

伊藤ほか(2013)が作成した体育授業における学習方略尺度は、小学生を対象として作成されたため、中学生においても使用可能であるかを確認する必要がある。そこで確認的因子分析を行い、クロンバックの α 係数を算出し、妥当性と信頼性を確認した。まず因子的妥当性を検討するために確認的因子分析を行った結果、学習方略の2因子モデルの適合度指標は、GFI=.97、AGFI=.93、CFI=.99、RMSEA=.07であった。これらの結果から、適合度指標は良好であるといえる。「一般学習方略」を構成する因子負荷量は「.89 ~ .72」を示し、信頼性は $\alpha = .91$ であった。また「SH方略」を構成する因子負荷量は「.99 ~ .79」を示し、信頼性は $\alpha = .88$ であった(図2)。以上のことから、本尺度が中学生を対象としても妥当性と信頼性が確保されていることが確認された。

2) 体育授業に対する学習方略及び劣等コンプレックスの基本統計量

表1は男子と女子それぞれに算出した各尺度内容の基本統計量(平均値、標準偏差、相関係数)と得点比較の結果である。男子と女子で t 検定を行った結果、C-心理・社会・身体要因得点、一般学習方略得点、SH方略得点において有意差が認められた。具体的には、C-心理・社会・身体要因得点、SH方略は男子が女子よりも有意

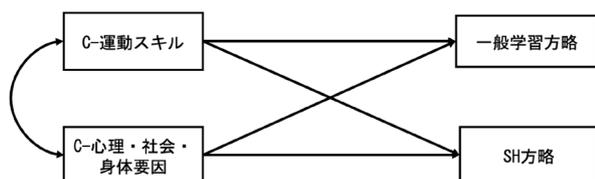
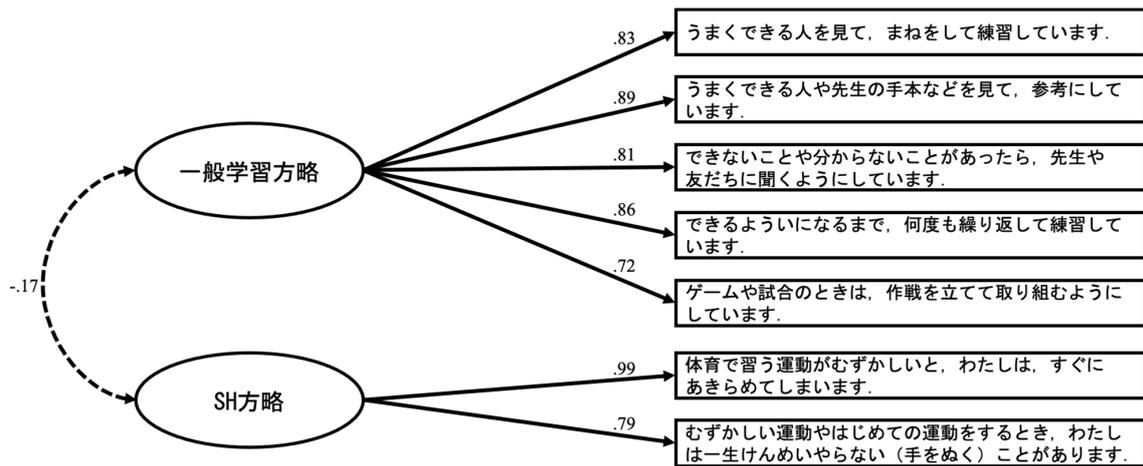


図1 分析モデル



モデルに共通する適合度指標
 GFI=.97 AGFI=.93 CFI=.99 RMSEA=.07
 †実線は正のパス、破線は負のパスを示す。
 ††R²は決定係数を示す。

図2 学習方略の確認的因子分析

表1 記述統計量

	男子 (n=117)		女子 (n=117)		t値	1	2	3	4
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差					
1. C-運動スキル	14.91	4.98	14.08	4.76	1.31	—	.86*	-.26*	.41*
2. C-心理・社会・身体要因	16.30	6.30	13.95	5.02	3.16*	.74*	—	-.31*	.56*
3. 一般学習方略	18.73	4.04	20.31	3.57	-3.18*	-.23*	-.42*	—	.00
4. SH方略	6.10	2.14	5.15	2.11	3.42*	.37*	.43*	-.26*	—

† t値は、男子と女子の得点比較をする際に算出されたものである。

*p<.05

†† 相関係数は右上段部分が男子、左下段部分が女子の値である。

に高く、一般学習方略は女子が男子よりも高い得点を示した。

各尺度間の相関係数については、C-運動スキルはC-心理・社会・身体要因、SH方略と正の相関（順に男子 $r=.86$, $r=.41$, 女子 $r=.74$, $r=.37$ ）を示し、一般学習方略と負の相関（男子 $r=-.26$, $r=-.23$ ）が認められた。また、C-心理・社会・身体要因はSH方略と有意な正の相関（男子 $r=.56$, 女子 $r=.43$ ）を示し、一般学習方略と負の相関（男子 $r=-.31$, 女子 $r=-.42$ ）が確認された。女子のみ一般学習方略はSH方略と負の相関（ $r=-.26$ ）を示した。

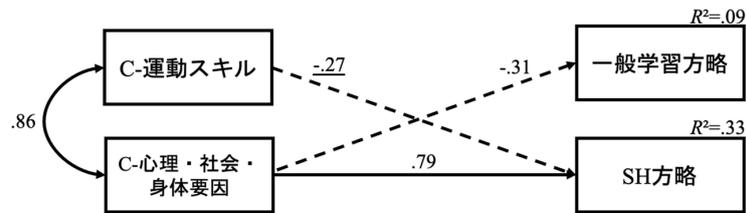
3) 男子における劣等コンプレックスと学習方略の関係

体育授業における劣等コンプレックスと学習方略の関係について共分散構造分析を行ったところ、男子においては適合度がGFI=1.00, AGFI=1.00, CFI=1.00, RMSEA=.00であり、基準をみたま値が得られた。説明力を示す決定係数（以下、 R^2 とする）は、学習方略は $R^2=.09$, SH方略は $R^2=.33$ であった。モデル内のパス値についてC-運動スキルと学習方略の関連は、C-運動スキルから一般学習方略に有意なパスが認められず、SH方略には負の影響（ $\beta=-.27, p<.10$ ）が示された。続いて、

C-心理・社会・身体要因と学習方略の関連は、C-心理・社会・身体要因から一般学習方略に負の影響（ $\beta=-.31, p<.05$ ）を示し、C-心理・社会・身体要因からSH方略に正の影響（ $\beta=.79, p<.05$ ）が確認された。最後にC-運動スキルとC-心理・社会・身体要因の相関は、強い正の相関（ $r=.86, p<.05$ ）を示した（図3）。

4) 女子における劣等コンプレックスと学習方略の関係

体育授業における劣等コンプレックスと学習方略の関係について共分散構造分析を行ったところ、女子においては適合度がGFI=.99, AGFI=.93, CFI=.99, RMSEA=.07であり、基準をみたま値が得られた。決定係数は、学習方略が $R^2=.17$, SH方略が $R^2=.19$ を示した。モデル内のパス値についてC-運動スキルから学習方略には、有意なパスが認められなかった。続いて、C-心理・社会・身体要因と学習方略の関連は、C-心理・社会・身体要因から一般学習方略に負の影響（ $\beta=-.42, p<.05$ ）を示し、C-心理・社会・身体要因からSH方略に正の影響（ $\beta=.43, p<.05$ ）が確認された。最後にC-運動スキルとC-心理・社会・身体要因の相関は、強い正の相関（ $r=.74, p<.05$ ）を示した（図4）。



モデルの適合度

GFI=1.00 AGFI=1.00 CFI=1.00 RMSEA=.00

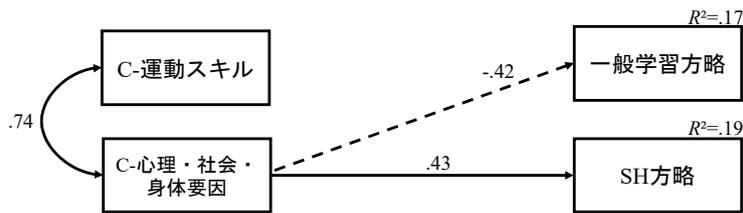
†実線は正のパス、破線は負のパスを示す。

††R²は決定係数を示す。

†††下線がない値は有意性が認められたパス係数 (p<.05) , 下線がある値は有意傾向が認められたパス係数 (p<.10) である。

††††モデル内における観測変数の誤差変数は、省略している。

図3 男子における体育授業の回避的態度と学習方略の関係



モデルの適合度

GFI=.99 AGFI=.93 CFI=.99 RMSEA=.07

†実線は正のパス、破線は負のパスを示す。

††R²は決定係数を示す。

†††下線がない値は有意性が認められたパス係数 (p<.05) , 下線がある値は有意傾向が認められたパス係数 (p<.10) である。

††††モデル内における観測変数の誤差変数は、省略している。

図4 女子における体育授業の回避的態度と学習方略の関係

考察

本研究の目的は、体育授業における回避的態度と学習方略の関係が男女によってどのように異なるのかについて検討することであった。本研究によって得られた結果を①C-心理・社会・身体要因と一般学習方略の関係、②C-心理・社会・身体要因とSH方略の関係、③C-運動スキルとSH方略の順に考察を述べる。

① C-心理・社会・身体要因と一般学習方略の関係

本研究では、男子と女子ともにC-心理・社会・身体要因が一般学習方略に負の影響を及ぼした。これは、性差に関わらずC-心理・社会・身体要因は、一般学習方略を低下させることを示唆している。一般学習方略は、「うまくできる人を見て、まねをして練習しています」、「できるようになるまで、何度も繰り返して練習しています」というように、体育や運動での学習における一般的な方略である。このような一般学習方略は、承認志向と集団志向などの他者志向的な動機によって高まる(伊藤, 2001)とされている。このことは、自己が周囲から受け入れられていると認識できる学習環境では、例え運動が苦手で学習課題を達成することに自信がない場合でも、適応的な学習行動が期待できることを示唆している。しかしながら裏を返せば、良好な関係を築くことのできない学習環境では、動機づけが高い生徒であっても

積極的な学習行動が抑制される可能性があるといえる。そのため本研究においても、周囲から笑われるといった項目が含まれるC-心理・社会・身体要因は、一般学習方略を低下させるのではないかと考えられる。

② C-心理・社会・身体要因とSH方略の関係

続いて、男子と女子ともにC-心理・社会・身体要因は、SH方略に正の影響を及ぼした。これは、性差に関わらず環境(例:周囲から笑われる)や心理・身体的特性(例:気が小さい、体が強くないなど)を理由に回避的な態度を抱く生徒は、不適切な学習行動を選択する傾向があることを示唆している。SH方略は、自分の能力が評価される状況で失敗の可能性があるようなとき、自尊心あるいは体面を守るために、成功の障害(ハンディキャッピング)になるような状況を作り出すことによって、失敗を外的に帰属する行為である(松尾, 1994)。つまりSH方略を多用する生徒は、運動課題ができないと感じたときに、できない理由を運動課題とは直接関係のない周囲の環境や心理・身体的特性に帰属し、回避的な態度を示すことで自らが傷つくことから避けている可能性がある。また伊藤(1991)は、SH方略が観察者の存在によって促進されることを述べている。このことから、体育授業において、失敗をすると周囲から嘲笑われるようなネガティブな状況下では、課題に対する回避的な態

度が強化され、あえて一生懸命に取り組まないなどの不適切な学習方略が選択されるのではないかと考えられる。さらに平野(2003)によると、運動有能感が高い者は、「他者の不真面目さ」がストレス発生源となっていることを確認している。このことについて小畑(2018)は、体育授業において「できない」と感じたときに、運動有能感の低い者のあきらめたりする回避的な対処がストレスになっているのではないかと推察している。そしてこのように、課題遂行に関わる主体にとってのストレスが他に存在する場合には、例えば学習課題を達成するだけの能力が備わっていたとしても、新たな行動がうまれない可能性がある(佐々木, 1999)。つまり、課題とは直接関係のない要因に活動を妨げられている場合には、個人的な属性(得意・不得、好き・嫌い、男子・女子など)の違いに関わらず、不適切な学習行動が促進させると考えられる。

③ C-運動スキルとSH方略の関係

最後に本研究では、男子のみC-運動スキルからSH方略の負のパスに有意傾向が示された。このことは、男子生徒において運動技能の低さを理由に回避的態度を示す者は、SH方略の選択が減少する傾向にあることを示唆している。学習課題を達成するだけの技能が備わっていないと感じ、一時的に課題から回避し、教師や仲間へ援助要請を求めることは、効率的な学習方略に含まれると考えられる。また男性は、自分と親密な関係(親友や恋人など)が競争相手となる場合、拒絶されたり、非難されたりするのではないかと不安から、成功を回避しようとする動機が高くなること(岡本, 1999)が確認されている。体育授業では競争を通じた学習が含まれるため、男子生徒は、人間関係を悪化させないために、あえて自分ができないことを口実に競争場面から回避しようとするのではないかと考えられる。しかしながら、運動が得意と思われている者が技能の低さを公言することは、時として皮肉にも聞こえてしまうことがあり、かえって対人関係を悪化させる可能性がある。また実際に運動が苦手な者が技能が劣っていることを理由に課題を避けようとし続けることは、周囲から「不真面目」と印象付けられることも推測できる。そのため、技能不足を理由に運動課題を回避しつづける生徒には、自らが進んで学習課題に取り組めるよう働きかける必要があるといえる。なお、本研究のC-運動スキルとSH方略における関係は、あくまで有意傾向($p<.10$)であり、今後は対象人数を増やし、有意差が認められるかを検討する必要があると考えられる。

まとめ

本研究の目的は、体育授業における回避的態度と学習方略の関係が男女によってどのように異なるのかについて検討することであった。中学生234名を対象に、体育授業における劣等コンプレックス尺度、学習方略尺度を用いた。分析モデルは、独立変数に体育授業に

おける回避的態度を附置し、従属変数に学習方略を位置づけたモデルを男女ごとに共分散構造分析を行った。その結果、①男子においてはC-運動スキルがSH方略に負の影響が示唆された。また、C-心理・社会・身体要因が一般学習方略を低下させ、SH方略を向上されることが確認された。②女子においては、C-運動スキルから学習方略への影響は認められず、C-心理・社会・身体要因は一般学習方略を低下させ、SH方略を促進させることが確認された。このことから、学習環境や心理・身体的特性を理由に回避的態度を示す者は、不適切な学習方略が促進され、効果的な学習方略が抑制されることが示された。また、運動技能の低さを理由に回避的態度を示す男子生徒は、競争を回避するために、あるいは援助要請を得るため、戦略的に自らが劣っていることを公言している可能性があり、このような態度は不適切な学習行動を抑制することが示唆された。しかしながら、運動技能を理由に回避的態度を示すことは、かえって対人関係を悪化させる可能性もあるため、自律的な取り組みを促す必要があると考えられる。

付記

本稿は、第1著者の2019年度修士論文のデータを再分析し、書き直したものである。

参考文献

- 阿部由佳理・久坂哲也(2020)小学校理科における学習観と学習動機が問題解決方略使用に与える影響。日本科学教育学会研究報告, 35(2):23-26.
- 安藤清志(1990)「自己の姿の表出」の段階「自己過程」の社会心理学。中村陽吉編。東京大学出版, pp. 143-198.
- 平野桂(2003)体育授業における運動有能感の変化がコーピングに及ぼす影響。教育研究科保健体育科専攻保健体育科教育専攻修士論文集, pp. 166-174.
- 堀野緑・市川伸一(1997)高校生の英語学習における学習動機と学習方略。教育心理学研究, 45(2):140-147.
- 犬塚美輪(2002)説明文における読解方略の構造。教育心理学研究, 50(2):152-162.
- 市原学・新井邦二郎(2005)中学生用数学・国語の学習方略の尺度の作成。筑波大学心理学研究, 29:99-107.
- 伊藤忠弘(1991)セルフ・ハンディキャッピングの研究。東京大学教育学部紀要, 31:153-162.
- 伊藤崇達・神藤貴昭(2003)自己効力感、不安、自己調整学習方略、学習の持続性に関する因果モデルの検証。認知的側面と動機づけ的側面の自己調整学習方略に着目して。日本教育工学雑誌, 27(4):377-385.
- 伊藤豊彦(2012)IVスポーツにおける動機づけ。セルフ・ハンディキャッピング—なぜやる気を出さないのか。中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編。ミネルヴァ書房, pp. 88-89.

- 伊藤豊彦 (2001) 小学生における体育の学習動機に関する研究：学習方略との関連及び類型化の試み. 体育学研究, 46 (4) : 365-379.
- 伊藤豊彦・磯貝浩久・西田保・佐々木万丈・杉山佳生・渋谷崇行 (2013) 小学生の体育学習における動機づけモデルの検討：動機づけ雰囲気認知, 学習動機, および方略使用の関連. 体育学研究, 58 (2) : 567-583.
- 松田泰定 (2002) 1. 共感性・思いやりの育て方 体育授業の心理学. 市村操一・阪田尚彦・賀川昌明・松田泰明編. 大修館書店, pp.170-176.
- 松尾陸 (1994) セルフ・ハンディキャッピング方略としての努力制御と課題選択. 実験社会心理学研究, 34 : 10-20.
- 宮本乙女 (2016) 第3章保健体育教師の専門性—保健体育教師論— 学び手の視点から創る中学校・高等学校の保健体育授業<体育編>. 鈴木直樹・梅澤秋久・宮本乙女編. 大学教育出版, pp. 25-34.
- 文部科学省 (2018) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.
- 文部科学省 (2019) 児童生徒の学習評価の在り方について (報告).
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/01/_iCSFileS/afieldfile/2019/01/21/1412838_1_1.pdf (参照日 2021年7月12日).
- 森年雅子・伊藤豊彦 (2010) スポーツにおける目標志向性とチームの動機づけ構造がセルフ・ハンディキャッピングに及ぼす影響. 島根大学教育学部紀要 (教育科学), 44 : 49-57.
- 西田順一 (2012) VI運動による健康の増進 運動行動の規定因—態度と規範. 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二編. ミネルヴァ書房, pp. 88-89.
- 小畑治 (2018) 体育授業におけるストレスへのアプローチ. 体育科教育, 66 (2) : pp. 46-50.
- 岡本直子 (1999) 親密な他者の存在と成功恐怖の関係について. 教育心理学, 47 (2) : 199-208.
- Ommundsen, Y. (2006) Pupils' Self-regulation in physical education: the role of motivational climates and differential achievement goals. *European Physical Education Review*, 12: 289-315.
- 小塩真司 (2017) 第5章因果関係の連鎖 重回帰分析の繰り返し 第2版 はじめての共分散構造分析. 東京図書株式会社, pp. 91-124.
- 今関豊一 (2019) 育成を目指す3つの資質・能力とこれからの学習評価. 体育科教育, 67 (5) : pp. 12-15.
- 佐々木万丈・須甲理生 (2016) 体育授業に対する劣等コンプレックスの因子的概念と児童生徒の主体的要因との関連. 体育学研究, 61 (2) : 663-680.
- 佐々木万丈 (1999) 体育学習における能力的不適応経験時のコーピングと心理的ストレス反応の関係：中学生の場合. 体育学研究, 44 (5) : 445-456.
- 三木かおり・山内弘継 (2005) 教室の目標構造の知覚, 個人の達成目標志向, 学習方略の関連性. 心理学研究, 76 (3) : 260-268.
- 玉木史朗・伊藤豊彦 (2003) 体育授業における小学生の学習方略に関する研究. 山陰体育学研究, 18 : 15-25.
- 辰野千壽 (1997) 学習方略の心理学—賢い学習者の育て方—. 図書文化.
- 當山貴弘・中須賀巧 (2018) 中学生の体育授業における目標志向性について—運動有能感得点と劣等コンプレックス得点の比較—. 兵庫教育大学学校教育学研究, 31 : 33-38.